

|                                        |                                                                                                             |           |              |
|----------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|--------------|
| 6-7                                    |                                                                                                             |           |              |
| 主題                                     | 個別ケアに向けた排泄への取り組み、成果と課題について                                                                                  |           |              |
| 副題                                     | 不快感をなくし、トイレでの排泄、布パンツを目指して！！                                                                                 |           |              |
| 排泄介助                                   |                                                                                                             | 個別ケア      | 研究期間 13ヶ月    |
| 法人名                                    | 社会福祉法人東京玉葉会                                                                                                 |           |              |
| 事業所名                                   | 特別養護老人ホーム 青陽園                                                                                               |           |              |
| 発表者：福士 里美・白鳥 英治<br>(ふくし さとみ)(しらとり えいじ) |                                                                                                             | アドバイザー：なし |              |
| 共同研究者：青陽園排泄委員会                         |                                                                                                             |           |              |
| 電 話                                    | 042-654-4025                                                                                                | F A X     | 042-654-4086 |
| 今回発表の事業所やサービスの紹介                       | 昭和41年に開設し、東京都では8番目、八王子市では一番初めにできた特別養護老人ホームです。長期入所140床、短期入所20床、計160床の施設です。従来型の特養ですが、グループ化を図っての介護サービスを行っています。 |           |              |

《1. 研究前の状況と課題》

当園では個別の排泄ケアを行っていたが、全体の約40%のご利用者が紙パンツを使用しており、トイレ誘導は定時という職員が定めた時間に行われている。又、パット内に排尿があった際には、パット交換のみが行われている。利用者がパット弄りしていた際「なぜ？」と疑問を持たない。又、利用者からなにかしらのトイレのサインがあったとしても気づけない。これは果たして個別の排泄ケアなのか？という疑問があった。

課題

- ・個人の排尿のリズムを把握していない
- ・使用している排泄用具の知識不足

《2. 研究の目的ならびに仮説》

個人の排泄の状況を把握していき利用者に合った排泄時間を調査し、トイレでの排泄を行う事で、紙パンツから布パンツに変更を行えるのではないかと。パットが濡れている状況が無くなれば、不快感が無くなりパット弄りがなくなるのではないかと。

委員会を中心に、パットの使用目的、機能の研修を実施する事で職員が排泄を見直し、

施設全体の排泄へのサービスが向上する事を期待して研究に取り組んだ。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・排泄委員会を発足し、中心となって取り組みを行う。
- ・委員を中心にパットについて再度知識を得る。(使用方法、吸収量、当て方)
- ・グループ毎に対象者1名決め研究を始めた。

対象者

トイレ介助を行っている利用者の中で、何かしらのトイレのサインがある利用者を対象とする。

取り組みの手法

- 1、1時間ごとにトイレ誘導を行い、排泄状況を表に記載。
- 2、約2週間行いトイレでの排尿を行えた時間をピックアップし、概ねの時間帯を決めその時間での誘導を開始し、表に記載する。
- 3、決めた時間で誘導を行い、パットが濡れていた場合時間を早めたり、又濡れていない事が多い場合は時間を遅くしたりと調整を行った。

～事例1～

A 様…92歳、男性。日中トイレ誘導。紙パンツ使用。腹部の痒みがあり弄ってしまう事多い。

- 1、1時間に1回誘導を行った。
- 2、初日はトイレやパット内に排尿がまばらだったが、朝食後から就寝するまで11回の誘導のなか、5回トイレでの排尿があった。研究を開始してから日中の覚醒状態も良くなり、自身で車椅子を動かし尿意を訴える様になった。約2週間誘導を行い、トイレでの排尿が多い時間をピックアップ、誘導を開始した。

～事例2～

B 様…84歳、女性。日中トイレ誘導、紙パンツ使用。トイレ迄は歩行。

- 1、1時間に1回誘導を行う。
- 2、パット内にまだ暖かい排尿が見られ、誘導時間を10分早めたが、パットに出してしまう状態。医務に相談「膀胱括約筋が低下し、歩いてトイレに向かっている際に出してしまっているのではないかと」助言あり、機能訓練士よりボールを使用した介護職員が出来る膀胱括約筋の鍛え方を教わる。

手法→柔らかいボールを膝に挟み数秒間キープを複数回行う。

トレーニングを開始後トイレに行くまでに排尿が出てしまう事が減った。

研究を開始してから、本人からの訴えが多くなった。排尿が出なかった事もあり、細かく表に記載を行った。

#### 《4. 取り組みの結果》

A 様の場合、トイレに座れば排尿が出る状況だった為時間を絞った場合、パットへ排尿が出てしまうのではないかと考えたが、そのような事は無かった。今まで尿意を訴える事は無かったが、誘導を開始すると次第に尿意を訴え始め便意の訴えも出た。研究を開始してから職員が関わる事で、日中の覚醒状態が良くなり車椅子を動かそうとする行動が見え「トイレ」と訴えるようになった。トイレでの排尿が行えた事、腹部の痒みを考えご家族に承諾をもらい、紙パンツから布パンツへ変更。腹部の痒みの訴えや、弄ってしまう事も減った。日中の覚醒、痒みの軽減を行った結果、夜間良く休まれている。

B 様の場合、研究を開始してから夜間寝つきが良くなり、トイレを気にする発言が増え、汚してはいけないと不安を感じる発言や行動があったので、職員同士で話し合いを行ったが、しかし本人より「スッキリしたほうが寝られるね」と発言が聞かれた為、暫く様子を見ることにした。臥床後起きている時間が減り、今では夜間1度トイレに行くのみでよく休まれている。膀胱括約筋に関しては、トレーニングの継続を行っており、少しずつ成果は見られている。周りの利用者も自発的に参加され、自然とレクリエーションという形になった事により、見守りを行いながら取り入れやすくなった。

研究を行う中、途中で入院をする事があり、退院後パット内に排尿が出てしまう状況が見られた。現在再度取り組みを行っている。

#### 《5. 考察、まとめ》

対象者の中には、日によって時間が変わってしまう方もいた。何か排尿のサインがあるのではないかと、本人の行動や言動を観察している。

以前より、排便に関して医務と連携を図っていたが、取り組みを開始してからなるべく下剤を使わない方法が定着し、排泄への考えが少しずつ変わってきているように感じた。

委員が変わった事で職員の考え方の統一、取り組みの継続を行う事が今後の課題である。

今後も対象者を増やし研究を行っていく事で、施設全体のご利用者がより良い生活を送れるように取り組みを行っていく事が大切である。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

尚、本研究発表を行うにあたり、対象者が特定されず、個人情報厳重に管理する事を利用者及び利用者家族に説明し、又その他すべての情報は本研究以外では使用しない事を口頭にて説明をしたうえで自由意志による同意を得た。

#### 《7. 参考文献》

なし

#### 《8. 提案と発信》

従来型の施設は集団でのサービスになりがちである。個別ケアのひとつとして排泄の見直しに取り組んだ結果、日常生活の活気に繋がった。

慢性的な人手不足の中、個別ケアを行う事への難しさはあるが研究を行った結果、ご利用者の日常生活の向上だけでなく、職員の意識改革に繋がりを、今後も取り組む事が大切であると感じる。